

Q.今回の展示で特に注目してほしい資料やエピソードはなんですか？

那波さん 一番の目玉は、西園寺が文部大臣時代に起草した「第二次教育勅語草案」だと考えています。この勅語草案には、日本だけを特別視して外国を下に見てしまう国民の姿に危機感を覚え、その是正を試みようとする西園寺の姿勢が大きく表れています。教育を正しい方向に導くことで、国民が世界各国を尊重し、世界から慕われていく。このことが、国際協調関係を構築するうえで重要だと西園寺は考えていたのですが、現状の教育ではそれが達成できないと判断したわけです。結果的にこの勅語草案は実現には至りませんでした。西園寺が教育というものにどれほどの重要性を感じていたか、さらには西園寺の時代を見通す先見性が見られる史料だといえます。ちなみにですが、「第二次教育勅語草案」は元々西園寺の自筆かどうか不明だったのですが、筆跡鑑定を行った結果、西園寺の自筆の可能性が高いことが判明しました。展示では、どのような筆跡鑑定が実施されたのかを具体的に示す予定になっているので、そういった点でも楽しめるかなと思います。

桂さん 西園寺文庫に関する史料に注目していただきたいと思います。というのも当時、私立の学校が大学に昇格するためには、図書館を持っていることが条件の一つでした。立命館もその条件を満たすために図書館を設置したのですが、西園寺が図書館設置を祝って自

分の蔵書を寄贈してくれました。その後も何度か蔵書の寄贈があったのですが、今回の展示資料の中には、西園寺が亡くなる直前に、残っている蔵書を立命館に渡すよう、中川小十郎に依頼していたことがわかるものがあります。西園寺が、最期まで立命館のことを気にかけていたことが伝わってくる、とても印象深い史料ですし、今回の展示のテーマにもすごく合っていると感じています。

塚本さん 熱田丸甲板上写真です。この写真は、パリ講和会議を終えて日本への帰路につく途中、熱田丸の甲板上で西園寺一行が撮影されたものです。当時の西園寺は、70歳という高齢で、病気がちだったのですが、日本を代表する政治家として首席全権に任命されました。写真からは、第一次世界大戦後の世界秩序を決定づける講和会議への出席、という重大な任務を終えた西園寺が、自身の娘夫婦たちを交えてリラックスしている様子が伝わってきます。

松原さん おすすめポイントは、西園寺公望と織田萬の関係性です。織田萬は、明治前期から昭和前期にかけて活躍した法学者で、立命館の名誉総長も務めた人物です。織田は、京都帝国大学の教員を養成する目的で、留学生に選出されました。その選出者こそ西園寺であり、織田の留学先となったフランスは、「日本にはもっと自由な空気が必要である」という西園寺の意見によ

るものでした。この話は、織田の随筆集である『法と人』に一部始終が載っています。西園寺と同じ時代を生きた人間から見た、西園寺の人物像を知ることができるでしょう。

井上さん 西園寺の国葬映像です。当時の総理大臣である近衛文麿が葬儀委員長を務めたことや、天皇からの下賜も含めた多額の国葬費が支出されたことなど、特別の扱いを受けています。これは近代日本の指導的役割を担ったことへの奉謝と、「国家主義」が加速していく中で「国際主義」を信条とした不世出な政治家、西園寺への哀悼の意を示していることが分かります。国際連盟を脱退し、本格的にアジアへの進出が国策となる時局も合わさり、私はこの映像から、帝国日本の終わりの始まりを感じました。武力侵攻による国際平和の危機に直面している現在において、この映像は強いメッセージを発しているのではないのでしょうか。



松原一智さん

Q.この展覧会を、どのような人たちに見てほしいですか？

那波さん まずは、これから未来を志す中学生、高校生の人に見てもらいたいです。立命館の魅力を少しでも感じてもらって、立命館大学を目指すのもありかな、なんて思ってもらえたらとても嬉しいです。あとは、現役の立命館学生・生徒・児童や職員の方々、全国各地で活躍されている校友の方たちにも見てもらえればなと思っています。立命館に所属していても、学祖である西園寺公望や、立命館の学園

史に触れる機会は、実はあまりないように感じています。これまで受け継がれてきた立命館の理念を改めて知ってもらって、それを力にして、社会で活躍してもらいたいです。最後に個人的な話ですが、昨年亡くなられた山崎有恒先生にも、ぜひ見ていただきたいです。もともと展示全体の構成の大枠は山崎先生が作られていて、その後体調が悪いなかでも展示のことをものすごく気にかけていらっしゃるま

した。展示の盛り上がりも含めて、空から見守ってくれたらと思います。

山崎有恒：立命館大学文学部教授。日本近代史。学校法人立命館発行『西園寺公望傳』編集委員の一人。立命館創立者・中川小十郎の事歴研究も手掛け、立命館 史資料センターの創始・創立者研究の中心的役割を担った。2024年11月21日死去。享年60歳。

各種 SNS



立命館 史資料センター ホームページ
<https://www.ritsumeai.ac.jp/archives>



公式 Facebook History Club 「and R」
<https://www.facebook.com/historyritsumeikan>



公式 YouTube チャンネル
<https://www.youtube.com/@user-RitsumeikanArchiveCenter>

本ニューズレターは、学園職員の方を対象に、少しでも学園の歴史に関心をもっていただくことを目的として発行した「インナーコミュニケーション」紙です。業務上「昔の立命館」のことを「知りたい」「気になる」と感じになったら、ホームページやフェイスブックなども是非ご覧ください。または直接史資料センターにお問い合わせください。

清新 | 立命館 史資料センター ニューズレター 第4号 /
立命館創始155年・学園創立125周年記念

発行日：2025年6月1日 / 200部
編集発行：立命館 史資料センターオフィス
〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 立命館大学 西園寺記念館
TEL. 075-465-8209 FAX. 075-465-7859



立命館創始155年・学園創立125周年記念

「西園寺公望の思想と立命館展」が開催されます。

西園寺が見通した先へと立命館は歩いていく。

明治維新という歴史の大きな転換点を駆け抜け、大正・昭和の動乱期に「自由主義」「国際主義」「民主主義」を貫いた西園寺公望の先見性。

その西園寺の視座を継承し、戦後日本を経て現在から未来へと、変化する時代の変わり目に挑み続ける立命館。

「来る時代の先を見通し、先んじて新しい価値を提供する」

という、西園寺公望から立命館へと続く歩みを紹介する展覧会。



会期・会場
2025年9月25日(木)－10月6日(月)
丸善・丸の内本店 4階ギャラリー
〈時間〉9:00～21:00 〈休館日〉なし

立命館創始155年・学園創立125周年記念式典で1日だけの特別開催！
2025年10月18日(土)
国立京都国際会館
※詳細は追ってお知らせいたします。

Interview /

展覧会、ただいま準備中！今どんな感じですか？

秋に東京と京都で開催される展覧会へ向けて、十河和貴准教授（北海学園大学）監修のもと、現在準備を進めているのは、普段は立命館 史資料センターで「中川家史料」の調査・整理・保存を担当している院生等5名です。みなさんに現在の準備状況や展覧会の見どころについてお聞きしました。

Q. 今どんな作業を進めていますか？

那波さん 現在は、主に2つの作業を行っています。まず、各所にある展示資料を、私たちが普段作業している史資料センターの中川小十郎研究室に収集し、整理・保管しています。学内の資料だけでみても、貴重書庫で保管されているもの、さらには学宝に指定されているものが多いため、資料の扱い方を改めて確認し、丁寧に扱っています。次に、記念誌に向けた展示資料撮影の補助です。撮影は専門の業者の方にご協力をいただいているのですが、歴史資料の扱いは私たちの分野になるので、資料の出納・セッティングは私たちが中心となって行っています。



那波宏哉さん



塚本遼平さん

Q. 今回の展覧会の準備に関わる中で、特に印象的だったことは何ですか？

那波さん 特に印象的なのは、一番初めの作業であった展示資料の選定です。今回の展示のなかで、私たちは立命館と中川小十郎についてのパートを任せてもらったのですが、立命館や中川小十郎に関する資料は「中川家史料」（中川小十郎の実家の寄贈史料群）だけでみても大量にあります。ただ、今回のテーマは「西園寺公望の思想と立命館」なので、西園

寺の教育思想を引き継いだ中川小十郎と、その実践が行われた立命館、といった話ができるような資料を、数多くの資料から選定するのがとても大変でした。このあと、これらの展示資料の解説文も自分たちで書いたのですが、全体のストーリーラインを踏まえて何を重点に置いて書くべきかをみんなで確認し合いながら書いたのも、それも印象的です。その

ほか、展示資料を史資料センターに運ぶときの緊張感であったり、調査を行った平井嘉一郎記念図書館貴重書庫内の酸素が薄く感じていつも以上に疲労感を覚えたり…（笑）、私たち自身も展示を運営する側になることは初めてだったので、すべてが新鮮で、とても良い機会をいただけたなと思っています。

Q. 西園寺の魅力はどういったところにあると感じていますか？

那波さん 今回の展示の趣旨に合わせるのであれば、やはり教育への強い関心だと思います。西園寺は政治家として、政党政治や国際協調の実現を目指していきませんが、その実現には正しい教育による国民の健全な発達が重要と考えていました。教育勅語の改正、当時はまだ馴染みのなかった女子教育や英語教育推進の動きは、こうした西園寺の考えからくるものといえます。しかし、西園寺の教育理念は国家レベルでは実現されず、むしろ西園寺が危惧した国家主義の方向へと傾き、結果的に政党政治と国際協調も挫折することとなります。時代を鋭く見通したからこそ西園寺の教育への強い想いが、展示を通してみなさんに伝わればいいなと思っています。

桂さん 政治の面だと、政党政治家として活躍した点にあると思います。今でこそ、政党政治は前向きに語られることが多いと思うのですが、西園寺が立憲政友会の総裁をしていた当時は、政党に対してあまり良い印象を持てない人が政府の中枢にも多くいました。その背景には、政党は国家のためではなく、自分たちの利益を優先するものだ、という見方が強かったことがあります。そうした中で、西園寺が首相に選ばれた理由としては、彼が公家出身だったことが大きいと思っています。私自身、このあたりの時代を研究していますが、実際に史料を読んでいると、西園寺が天皇や国家のことをとても気にかけていた様子がよく表れています。また、他の政治家たちからも、「公家出身だからこそ国家のことをちゃんと考えている」と見られていました。やはり、

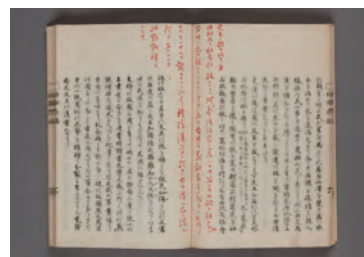
伝統的権威である公家という背景があったからこそ、長く政治の世界で影響力を保つことができたのではないかと思います。それに加えて、彼自身が政党政治を推し進めたいという柔軟な考え方を持っていた点も、西園寺の魅力を一層引き立てているように感じます。
塚本さん 伝統にとらわれず型破りな生き方を貫いた点に感じます。たとえば幕末のころ、西園寺は公家でありながら、琵琶の演奏や古くからの儀礼を学ぶことを嫌って、武芸の修練に励むなど、公家の中では変わった存在でした。また西園寺は、明治維新の最中、公家の中でもいち早く洋服を着て断髪するなど、新しい文化を積極的に受け入れました。多くの人々が伝統に縛られていた時代にあって、新たな文化を取り入れる西園寺の姿勢には人間味があり、大変魅力的だと思います。
松原さん 自由主義に対するこだわりを持っていたという点です。たとえば、井上毅の論文集『梧陰存稿』への書き込みには、国民の活力を結集させて国家の力とする自由主義こそが、日本の文明化に必要であると書かれています。また、キリスト教系の学校への風当たりが強い中で、伊藤博文に宛てた手紙には、同志社が国民思想の開拓に意義があることを強調しています。こうした点から、西園寺が自由主義へのこだわりを持っていたことを感じることができると思います。
井上さん 公家出身でありながらも国際派知識人として活躍したところですね。江戸時代を専攻している私からすると、公家という存在は、幕府とは近い関係であり、閉鎖的な印象を

持っています。西園寺は幕末の動乱期に生まれましたが、伝統的な公家社会において、進歩的知識人として頭角を現し、日本の舵取りをしていく姿はとても興味深いです。パリ留学で培われた広い国際的視野は、「自由」と「清新」という学園の建学の精神に引き継がれており、教学理念である「平和」と「民主主義」にも大きく関わっています。挑戦を続け、世界に開かれたこのような姿勢から学び得ることは大きいと思います。

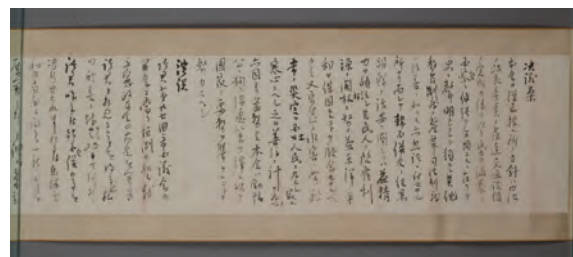


上：井上雄介さん/下：桂淳志さん

展覧会の展示内容を少しご紹介 /



『梧陰存稿』西園寺書き込み



政友会大会の決議・演説草稿



西園寺文庫